

行事が学校を、

特集

毎年恒例で実施される学校行事。見失われがちな本来の意義や目的を見直し、潜在する効果を最大限引き出す方法を考える。

学校行事を見直す

考えられる四つの効果 学習指導要領から見えてくる四つの効果 しかし、それらは学校行事をただ実施するだけでは得ることはできない。進路指導や授業と関連させるなどの工夫が必要になってくる。

生徒を 活性化させる

2 効果的な学校行事にするために

主体性や意欲を高める 今でも生徒主導で行事を進めている高校は多いが、あくまで放任するのではなく、教師はアドバイザーとして生徒と接したい。主体性や意欲を育てるために、事前研究などを課す方法もある。

視野を広げ自己実現を図る 各行事のテーマを進路と関連させれば、直接、進路と結びつく職場訪問だけでなく、進路と関係ないような文化祭や弁論大会などの行事も、進路を考えさせるきっかけとできるだろう。

学習効果を高める 学校行事への生徒の関心は高く、それだけに行事と各教科内容を結び付けられ、高い学習効果を上げられる。また、表現力や課題解決能力など、授業だけでは育成しにくい力も養成できるだろう。

社会性を養う 集団で活動することの多い学校行事は、生徒が協調性や責任感を養う良い機会となり得る。修学旅行や職場訪問では、普段あまり接触を持たない社会と交渉するなど、貴重な体験ができるだろう。

学校行事を見直す

学校行事が もたらす 四つの効果

文化祭や体育祭、修学旅行などの学校行事は、高校生活の思い出として、生徒たちの中で大きな位置を占めるだろう。それは、生徒がそれだけ熱心に取り組んでいる表れとも言える。そんな学校行事を、一時のイベントで終わらせるのではなく、生徒の成長を促すきっかけとして、うまく利用したい。そもそも、学校行事とはどんな目的で行われるべきものなのか。「学習指導要領」を見ると、内容面から大きく五つに分類されている。学校生活に有意義な変化や折り返しを付け、新しい生活の展開への動機付けをする、「儀礼的行事」、普段の学習活動の成果を生かし、その向上意欲を一層高める「学芸的行事」、安全な行動や規律ある集団行動の体得、責任感や連帯感を涵養する「健康安全・体育的行事」、普段と異なる生活環境で見聞を広め、自然や文化に親しみ、集団生活や公衆行動の体験を積む「旅行・集団宿泊的行事」、社会奉仕の精神を養うと共に、職業観の形成や進路選択に資する体験を得る「勤労生

学校行事の意義・目的を 再確認する

産・奉仕的活動」の五つである。また、実施上の配慮として、学校の創意工夫を生かし生徒の自主的、実践的活動が助長されること、他の教科との関連を図りながら人間としての在り方、生き方の指導を行うこと、とある。これらをまとめると、以下の四つの効果を得られる点で、学校行事は重要な活動だと言えるだろう。
生徒の主体性や意欲を高めることができる
生徒の視野を広げ、自己実現を図ることができる
他の教科との関連を深め、学習効果を高めることができる
社会性を養うことができる
しかし、ただ学校行事を実施するだけでは、これらの効果を十分に上げることはできない。明確な目的を設定し、取り組みの進め方や内容に工夫が必要になるだろう。例えば、各行事のテーマや実施方法に、進路観の育成を促す視点を盛り込んだり、各教科への関心

が高まり、他学年や地域の人と触れ合う機会を持つよう仕掛けることなどが考えられる。また、実際に仕掛けを施す際は、生徒に強制するのではなく、生徒会や各種委員会、クラスのリーダーに話を持ち掛けるなど、生徒が自主的に活動し、参加する形で働き掛けたい。学校行事以外の特別活動（ホームルームや生徒会）との関連がポイントとなる。

進路指導や授業との 関連を深め 効果を波及させる

2002年4月から完全週5日制が実施され、授業時間数が減少する中、学校行事の精選も考えられる。しかし、単に減らしてしまつと、行事がもたらす様々な利点を失つ結果となる。例えば、学校行事で高められた意欲や主体性は、個別の行事だけではこぼれ、学習や進路の取り組みに対する積極性

生徒の主体性や意欲を高める学校行事

通常の授業やHR以上に、学校行事は生徒の主体性や意欲を育てるには絶好の機会である。行事で育てられた主体性や意欲は、学習意欲や進路意識の向上にもつながっていく。決められた学校行事を、受け身的にこなしていくのではなく、生徒会やクラス主体で運営させるなど、生徒が自分たちの行事として自主的に動く環境を整備すれば、行事への参加意欲も高まるだろう。教師は良きアドバイザーとして、生徒の主体性、意欲を育てていきたい。

（文化祭）

生徒主導、教師はアドバイザー

文化祭は、多くの高校で企画から準備、運営など一連の流れが生徒主導で行われている学校行事の一つだろう。しかし、文化祭をただ楽しいだけの行事ではなく、学習面や進路面でも有意義な行事に改善するためには、生徒主導の運営ではあるが、教師も提案、助言を行える環境が必要だ。文化祭実行委員会の話し合いに教師もアドバイザーとして参加するなど、教師の意見を伝える場を確保したい。ただし、指示

の出しすぎは逆効果なので注意したい。

発表内容がなかなか決まらないときには、学問研究など進路に関係したテーマを提案してみる。あるいは、準備をもっと効率よく進めるためのアドバイスなど、生徒だけではなかなか気付かない点についてアドバイスしたい。

さらに、先輩たちはどのように準備していたかを伝え、自分たちも頑張ろうという意欲を引き出したり、クラス対抗形式の場合は、他のクラスの進捗状況を伝えるなど、生徒に刺激を与えて意欲を高める方法もある。

ある高校では、企画、会計、広報など、多くの係を作り、一人ひとりに少しずつ責任を持たせている。それによって、生徒は文化祭への参加意欲を高めることができる。この場合も、それぞれの係に指導教師を付け、必要ときには助言できる距離を保ちたい。係の仕事をつまこなせれば、文化祭への参加意欲を他の行事や生徒会、委員会活動などへの主体的な参加につなげ

ることができるだろう。

また、ある高校では、文化祭開催の有無から生徒たちに決めさせることで、文化祭の意義や目的について一人ひとりが考える機会を与えている。これによって、文化祭は自分たちの行事だという気持ちを強く持たせている。

（修学旅行）

事前研究を行い訪問地への興味を喚起

ただガイドの話聞き、観光するだけの修学旅行では、その旅行を有意義なものにしようという意欲を生徒に持たせることは難しい。思い出作りだけに終わらない、生徒主導の修学旅行を実現するためには、その土地の文化や歴史を知るなど、修学旅行に対する明確な目的を持たせ、生徒の興味を喚起するとよいようだ。興味を持てれば、事前に調べてみようという意欲につながる。主体的に事前研究をし、旅行先

でも意欲的に調査を行うことができれば、日常でも意欲的に調べたり研究したりするようになるだろう。旅行終了後にレポート作成を課している高校も多いようだ。旅行中に終了後のレポート作成を意識させることで、修学旅行への参加意識の向上につなげている。

また、海外も含め、いくつかの候補地から、生徒がより興味の持てる旅行先を選択させている高校もある。これも、修学旅行に対する意欲を高める一つの方法と言えよう。

（クラス対抗の催し）

各生徒の能力を引き出すきっかけに

クラス対抗の催しは、クラスの団結力を高めると同時に、体育祭、合唱祭など、内容が多彩なので各生徒が自分の能力を発揮できるチャンスがある。しかし今の生徒は、機会があっても主体的に自分から何か役割を果たそうとせず、リーダー的役割を果たすようなポストに立候補する生徒は少ない。自分の役割を果たす大切さを知り、集団をまとめるリーダーとなる人材に育てるには、学校行事は良い機会だ。教師が個別に声をかけ自信を付けさせれば、生徒も安心して役割を果たせるだろう。

事例研究①

生徒の主体性や意欲を高める修学旅行

静岡県立清水東高校

テーマからコースまで生徒が考案する研究旅行

綿密な事前研究を行い大量のレポートを作成

清水東高校で2年次に行われる、「研究旅行」の歴史は古く、1955年に開始された。旅行先は一貫して京都・奈良・同校の「研究旅行」では、班ごとに決めたテーマについて調べていくが、京都・奈良は文化や歴史に関するテーマが豊富な上、同じテーマでもバリエーションに富んだコース設定が可能だからだと言います。

「お茶と京菓子文化」「京都の水」「建築の歴史」「服飾の歴史」「香を聞く」「扇子」「悲劇の街、京都」など、生徒は調査したいテーマを決め、下調べを行う。そして、食事先や使用する交通機関も含め、そのテーマに沿った見学コースを各班で設定し、現地で丸3日間の現地調査を行う。旅行後は、班ごとに15枚程度の原稿用紙に、写真や資料、図表も挿入しながらレポートを作成する。

生徒を手助けする事前研修講座

「テーマは、4人から6人の各班員が扱いたい題材を出し合い決めていきます。テーマの対象が大きすぎれば絞り込みが必要ですし、事前研究の進め方が分からずつまづく班もあります。生徒はまさに手探りの状態です。そこで、テーマ設定や事前研究の参考になればと、例年、教師が事前研修講座を開催しています」

この話すのは、今年度第2学年の学年主任を務める藤井孝先生。事前研修講座は、2学年担当の教師全員が行い、例年講座数は10から15。担当教科とは全く関係のないテーマを扱う教師もあり、その準備には手間と時間がかかるという。「京都・奈良の仏像とその見方」「時代ごとに変化する庭の様式」「外国人に評価の高い寺」など、内容は多彩だ。

生徒は必ず一つの講座を受講する。テーマがほぼ固まっている班は、自分たちが扱うテーマに近い内容の講座を受講し、テーマへの理解をさらに深めていく。なかなかテーマが定まらず、班員それぞれが異なる講座を受講し、その内容を持ち寄って、自分たちに合うテーマを探す班もある。事前研修講座をこのように利用

するかも、生徒たちは自分たち自身で考え、受講している。

また、事前研究の途中経過を数回に渡って提出させ、教師から研究を深められる見学先を紹介するなど、テーマやコース設定に役立つヒントを与えている。生徒が徐々に意欲や主体性を高められる仕掛けが随所に施されているのである。

こうして意欲を増して主体的に旅行に参加する生徒たちは、旅行中、旅館に戻ってきてからも時間を余すことなく、レポートのために、その日の見学で分かったことや感じたことを熱心に書き留めていると言います。課題となっている大量のレポートも、プラスに影響しているようだ。

先輩のレポートを意欲向上に活用したい

提出されたレポートは、教師が審査し優秀作品が決められる。この作品は生徒会誌に掲載されることとなる。

「昨年の優秀作品は陶芸がテーマで、かなり内容の深いものでした。工場見学などは他の班でも取り入れていたが、自分たちで京都在住の著名な陶芸家を調べてアポイントを取り、陶芸家の方に1日張り付いて取材したのはこの班だけです。このように、教師が意図した以上の成果を上げる班も出てきます」

研修旅行の成果であるレポートは、各



静岡県立清水東高校 第2学年主任 藤井孝 昭和68年、香川県生まれ 同校に赴任して 今年で4年目 世界で抱負

クラス1冊にまとめられ図書館に保管される。これらは、次年度のテーマ設定の参考にされることもある。進路指導部長の西野耕一先生は次のように話す。

「先輩のレポートを参考にするだけでなく、その中の研究をさらに深めていくってほしいと思います。先輩から受け継いだテーマなら、いい加減な調査はできないと感じ、より意欲的に取り組めるでしょう。事前の研修講座も教師が行うのではなく、前年に作成したレポートを基に3年生が行うのも面白いと思います。現地に行つて実際に研究した先輩が話す方がリアルティがあるでしょうし、先輩に成果を発表するとすると、課題研究に対する意欲も増すでしょうから」

さらに生徒の自主性を最大限発揮させる方法を同校では模索している。

行事が学校を、生徒を活性化させる

生徒の視野を広げ、自己実現を図る学校行事

多くの高校では、LHRなどの時間で進路学習を行っているが、学校行事も進路を考えるきっかけとなり得る。例えば文化祭や修学旅行で、生徒は展示発表の準備や訪問先の事前研究などに多くの時間をかける。このように生徒が労力をかけて作り出す過程を、進路観を育成する1ステップにできないだろうか。学校行事を生徒の視野を広げる好機と捉え、自己実現のための進路指導と結び付ければ、それも可能だろう。

（文化祭）

展示発表のテーマを 進路学習に関連させる

文化祭では、例えば、展示発表のテーマを「大学で学べる学問」「最先端の研究紹介」「高校に關係する職業」などとすれば、進路学習と関連付けられる。教師から提案する際は、そのテーマを取り上げる面白さや、進路を考えると役に立つことを伝えたい。校内の取り決めとして、毎年1年次は職業や学問に關係することを展示発表するなど、恒例化させるのも一つの方法だ。そのときは、教師間でコンセン

徒が進路を考える機会となるようなテーマを設定したい。

（講演会）

職業、学問研究と 連携させる

話を聞くことで視野を広げ、自己実現を図るための情報が得られる講演会。著名人に限らず、地域で活躍する人や卒業生など、より身近な人の話が生徒に社会を知るきっかけや、進路を考える上での新たな気付きを与えてくれることもある。いずれにせよ、目的に添った人選を行うことが大切である。講演会の前後に調査研究を課せば、さらに効果を高めることができる。

ある高校では、学部・学科研究を行う2年次に大学教授を招き、学問や研究の内容などについて講演してもらっている。講師となる大学教授は24名。生徒は当日、言語学、心理学、経済学、天文学、農学、薬学、建築学など、自身が希望する学問ごとに分かれ、その学問を専門とする教授の下で、事前に行った研究内容を発表する。生徒の発表を聞いてから話してもらったので、大学教授は生徒がどこまで知っているか、どんな疑問を持っているかなどを把握して話すことが出来る。

（修学旅行）

関心のある 大学や企業を訪問する

生徒の興味・関心を喚起する修学旅行から一歩踏み込み、旅行先で職場訪問や大学見学などを行ってはどうか。福岡県のある高校では、職場訪問を

（職場訪問・職業体験）

実際に職場に足を運び 職業の実態に触れる

職場訪問や職業体験は職業観を育成し、実際に職業を知ること、憧れの職業の現実の厳しさを知り、進路選択をより真剣に考えるきっかけともなる。修学旅行と統合したり、土曜日や長期

事例研究② 生徒の視野を広げ、自己実現を図る学校行事

福岡県立

小倉高校

学校行事を通して、 段階的に 進路について考える

まず始めに文化祭で 情報活用能力を身に付ける

小倉高校では、3年間の学校行事を進路指導の観点から体系化した「倉高 ONLY ON PLAN 計画」を実施している。その第1弾が、5月下旬に開催される文化祭。入学して間もない1年生は、2クラス合同で一つのテーマについて展示発表を行う。このための目的の一つに、情報活用能力を身に付けることがある。今後進路を考える中で、職業や大学、学部・学科などについて調べる必要が出てくる。そこで、情報の入手方法や、得た情報を選別してまとめる方法などを、文化祭で一通り体験しておこうというわけだ。第1学年を担任する瀬在丸英喜先生は次のように語る。

この後7月には、高校3年間の過ごした方を考え、視野を広げ、様々な学問に興味が出るように、それぞれのテーマにふさわしい卒業生と大学教授による講演を実施している。そして2学期には、自分の考えをまとめ発表する弁論大会が開かれているが、「ここでも、女性の権利」「障害者に対する意識改革」など、徐々に進路の方向性が見え始めていると感じられるテーマがあったようだ。

企業訪問、学部別講演会で 進路を絞り込む

2年次は、企業訪問、学部別講演会などの学校行事で進路を絞り込む。第2学年担任の井上哲秀先生は「こう語る。

休暇を利用してでも実施したい。栃木県のある高校では、約60か所もの職場で1日職業体験を行っている。数が多いのはできるだけ生徒の希望に添えるようにするため。ただ見学し質問するだけでなく、仕事も体験させてもらう。また1日通しての体験なので、普段は見ることができない仕事の厳しい面なども知ることができたようだ。

（弁論大会・小論文コンテスト）

話すこと・書くことが 自己発見のきっかけに

弁論大会も小論文コンテストも、話す、書くの違いがあるにせよ、あるテーマについて自分の意見を他人に伝えるという点で共通している。どちらの場合も、考えをまとめるとき、自分はどうなことに興味を持っているのかなど、自分をより深く理解するきっかけとなるだろう。また、他の生徒の発表を聞いて、自分と異なる意見を知ることが、視野を広げることにつながる。

例えば、弁論大会や小論文のテーマとして、自分を見つめ直す「将来の夢」「10年後の自分」、あるいは自分の興味・関心を深められるような「今、関心のある社会問題」などを生徒に提示し、その中から選ばせるとよいだろう。生



福岡県立小倉高校教諭
井上哲秀
昭和40年、
福岡県出身。
担当教科は物理。
進路指導部は
今年で6年目。

触れ、職業への関心を高めることが目的です。市役所や養護老人ホーム、環境科学研究所、JRRの工場など、12か所から生徒が選択し訪問しました。学部別講演会は、法学系、文学系、生物系、エネルギー・環境系、医療系など7コースに分かれ、各コースの専門家を招き、講演をしてもいいです。

「倉高 ONLY ON PLAN 計画」の最後の行事となる3年次の文化祭では、劇を行うことになっている。今年には特に教師の指導がなくとも『The Long And Winding Road』など、進路や生き方を題材にするクラスが多かった。生徒が「一番伝えたいこととして、進路や生き方を劇の題材に選んだことは、様々な学校行事を通じて、真剣に自分の進路を考えてきた表れと言えるだろう。」

行事が学校を、 生徒を活性化させる

特集
生徒を活性化させる

教科との関連を深め、学習効果を高める学校行事

新聞記事の読解を行う。文化祭で扱うテーマを糸口に、興味の対象をさらに深め学習への意欲向上につなげたい。

（英語スピーチコンテスト）

他教科のテーマについて英語で自分の意見を発表

英語スピーチコンテストは、英語力の向上のみならず、自己表現力や文章力の養成なども期待できる。いくつかの課題英文に対する自分の考えを英語でスピーチさせれば、読解力の養成にもなる。「地域の活性化」（理科）「環境問題を考える」（理科）などからテーマを選択させれば、他教科の学習効果の向上にもつながる。

（修学旅行）

パソコンや英語を使用する状況を作り出す

修学旅行の事前研究では、情報収集

際に英語を使わざるを得ない状況に置かれることで、実践力が付き英語学習への意欲もわいてくるようだ。

（講演会）

学習意欲を刺激する内容に

講演会は、毎年恒例で有識者を招くことになっている高校が少なくないようだ。そこで、例えば、政治経済の授業で「企業と市場」を扱っている時期に、経営専攻の大学教授や企業人を招待して、現在の日本の企業と市場、または経済状況について話してもらおう。このように、授業の進度を考慮し、内容も授業と関連のあるテーマで話してもらえば、内容の理解と共に、生徒の学習意欲をより一層向上させることができるだろう。

職業研究や学部・学科研究と運動して、社会人や大学教授の講演会を行う高校も多い。1人の社会人として、高校生のとときにどんなことを学んでおいてほしいか、また自分が高校生のときこんなことを勉強して役に立った、もっとこんなことを勉強しておけばよかった、などについても話してもらえば、その職業や学問に興味を持つ生徒の日々の学習意欲を刺激できるだろう。

（社会奉仕活動）

地域の奉仕活動で勤労の尊さを実感

生徒は、自分が地域社会の一員だと感じる機会は少ないのではないだろうか。その自覚が足りないと、通学路に平気でゴミを散らかすなど、周辺住民の迷惑となる行為を繰り返すことになり得る。そこで、行事の一環として地域社会で奉仕活動を実施し、自分も地域の一人であることを理解させたい。同時に勤労の尊さを理解させ、奉仕の精神を養成することもできるだろう。ある高校では、最寄り駅から通学路の清掃を実施している。その結果、生徒は学校周辺で生活する地域の人を身近に感じられるようになったと言った。地域の人から感謝の言葉をかけられ褒められることで、社会奉仕の精神も養成できたようだ。また、体を使って働き、清掃後の奇麗な状態を見ることで、勤労の尊さを感じられたようだ。

行事が学校を、生徒を活性化させる

効果的な学校行事にするために

の手段として、本などの資料だけではなく、パソコンを使ってインターネットから情報を引き出したり、電子メールを使って訪問先の人から情報を提供してもらえば、授業でしかパソコンを使用しない生徒も、日常生活での実用方法を知りきっかけとなる。

また、最近増えている海外への修学旅行なら、訪問先の国の歴史や文化や地理や歴史の授業を利用して調べてもよいだろう。訪問先で現地の高校生や企業などと交流する機会を設け、その中で英語を使っただけでなく、事前に電子メールを英語で交換し合ってもよい。修学旅行で韓国を訪れているある高校は、事前に日本の侵略の歴史や在日韓国・朝鮮人への差別の現実などを学び、現地でも独立記念館を見学する。また、釜山の高校と交流会を持つことで、生徒は身を以て国際交流の重要性を感じていると言った。このとき使用するのは、日本語でも韓国語でもなく、お互いが共通に勉強している英語。実

社会性を養うことができる学校行事

入ることができ。このときアドバイザーとする係を設置しておけば、困ったときに、上級生に助言を求めやすくなるだろう。同時に、下級生にアドバイザーとする体制が明確になり、上級生は下級生を指導する責任感を感じるようになる。また、こつした中で学年の枠を越えた新しい人間関係が築かれていくだろう。

（職場訪問）

職場を通して社会を垣間見る

職場訪問は、普段は接触する機会が少ない社会を垣間見られる貴重な機会でもある。普段は接点のない社会人と触れ合い、実社会の厳しさを生徒に実感させられるような取り組みにしたい。

ある高校で職業体験を実施したところ、生徒は体験した職業について深く知るだけでなく、仕事をすることで協調性や責任感が必要だと強く感じたと言

学校行事を各教科の学習内容と関連付けることで、授業への意欲を高められるだろう。また学校行事では、自分の考えを表現する力、自分で課題を解決する力など、今求められている力を育成できる。こつした力を、教科書に沿って進める授業の中だけで身に付けることは容易ではない。しかし、学校行事を通して、個々の異なる意見を持つ集団の中で自分の意見を主張したり、発生した問題に対処する過程で、身に付けることも可能だろう。

（文化祭）

発表テーマへの高い関心を利用する

文化祭前後、生徒は展示や舞台発表の準備の過程で発表テーマについて新しい知識を得ており、関心も高いはずである。文化祭の前後の授業では、その高い関心を利用して、発表テーマに關係する内容を扱ってみてはどうだろう。例えば、「環境問題」をテーマに展示発表する場合、公民で各国の地球温暖化防止の取り組みを、理科で環境ホルモンを、国語で森林伐採の論説文の読解を、英語で大気汚染に関する英字

学校行事では、集団で活動することが多いので、この機会を利用して、生徒に協調性や責任感などの社会性を身に付けさせたい。また学校行事は、学校を飛び出して学校よりも広い社会の人々と交流する絶好の機会でもある。地域という社会における学校を意識したり、日本各地や世界の人々との交流を深める活動を通して、自分が複数の社会に所属していることを認識させ、自分とそれら社会との關係を考えるきっかけを与えたい。

（文化祭）

集団で活動するときの組織作りや苦労を経験

文化祭の準備過程で、生徒は複数の人間が一つのことに取り組む難しさ、組織の中で一人ひとりが責任を持って自分の役割を果たす必要性などを実感できるだろう。リーダー的役割を任せられた生徒は、どのように集団をまとめつつ張っていくかを学ぶことになる。

また、学年ごとに1年生は展示発表、2年生はビデオ発表、3年生は舞台発表と決まっている場合は、前年の経験を活かして上級生が下級生にアドバイ